

聖書：ルカ 22：14～23

説教題：新しい契約の恵み

日時：2012年12月16日

プロテスタントの教会では、「礼典」と呼ばれる儀式が二つあります。一つは洗礼式、もう一つは聖餐式です。どちらもイエス様が世々の教会が守り行なうようにとみことばにおいてはつきり命じられた儀式です。洗礼式については、マタイ 28章最後の大宣教命令の中で、「あなたがたは行って、あらゆる国の人々を弟子としなさい。そして、父、子、聖霊の御名によってバプテスマを授け、・・・」とあります。聖餐式については、これから見る最後の晩餐の席上で定められました。前回イエス様は、この食事のためにどれほど慎重な準備をされたかを私たちは見ました。その深い思いは、今日の箇所のイエス様の最初の言葉にも現われています。14～15節：「さて時間になって、イエスは食卓に着かれ、使徒たちもイエスといっしょに席に着いた。イエスは言われた。『わたしは、苦しみを受ける前に、あなたがたといっしょに、この過越の食事をするをどんなに望んでいたことか。』」

過越とはイスラエルがエジプトで苦役のもとにあった時、エジプト全土では初子がみな打れたのに、主の命令によって子羊の血を2本の門柱とかもいに塗ったイスラエルの家だけは、そのさばきが過ぎ越したことを記念するものです。ユダヤ人は、この偉大な救いのみわざを覚えるため、ほふった羊の肉を焼いて食べると共に、種を入れないパンと苦菜を食べる過越の祭りを、みことばに従って守ってきました。しかしこれは、過去を振り返るだけのものではなく、16節でイエス様が「過越が神の国において成就するまでは」と言っておられるように、将来の救いのみわざを指し示すものでもありました。イエス様はそれをここでお示しになり、過越にとって代わる新約の新しい礼典、第一回目の聖餐式を与えられたのです。16～18節は過越の食事、19節以降はイエス様が聖餐式を制定された部分と見ることができます。

19節：「それから、パンを取り、感謝をささげてから、裂いて、弟子たちに与えて言われた。『これは、あなたがたのために与える、わたしのからだです。わたしを覚えてこれを行ないなさい。』」まずここで新しいことは、イエス様が「これはわたしのからだです。」と言われたことです。過越の食事においては、このような言葉はありません。これは明らかにイエス様独特の言葉です。イエス様は「あなたがたのために与える、わたしのからだです。」と言われました。ここにイエス様が間もなく十字架上でささげられるご自身のからだを指していることが明らかにされます。「あなたがたのために」とは、「あなたがたの身代わりとして」ということです。

イエス様は「わたしを覚えてこれを行ないなさい。」と言われました。私たちは御言葉を聞いて、そこに示されているイエス様に信頼しさえすれば良いのです。しかしこの礼典をイエス様が決めてくださったのは、私たちの弱い信仰が支えられるためです。私たちはある意味で、みことばをただ聞くよりも、聖餐式にあずかることによって、キリストの恵みをはるかに良く

体験させられるのです。まず私たちは、裂かれたパンを見て、視覚的にイエス様の十字架の死を思わされます。そしてそれが自分のところに回って来て、自分の手に取ることにより、確かに神の恵みが私の所まで来ている！と実感します。そればかりか、それを口に入れ、体の中へ飲み下すことによって、キリストの死に至る従順と測り知れない犠牲による恵みが、確かに私の内に入った！パンが私の肉体を養うように、キリストが私を養い、私のうちに生きておられる、と知るのであります。このように、そうでもされないと思っている私たちの五感すべてが眠りから起こされて、ただキリストだけを仰ぎ、見つめるようにさせられ、その信仰を通して、私たちは恵みを実際に受け取ることになるのです。

ですから私たちが正しい態度で聖餐式にあずかる時、パウロが1コリント10章16節で「私たちが祝福する祝福の杯は、キリストの血にあずかることではありませんか。私たちの裂くパンは、キリストのからだにあずかることではありませんか。」と言っていますように、現実的にイエス様の恵みにあずかるのです。ウェストミンスター信仰告白第29章7節：「ふさわしい陪餐者は、この礼典において、見える品々にあずかりつつ、信仰によって現実にも実際に、しかし身体的また肉的にではなく霊的に、十字架につけられたキリストと彼の死のすべての祝福を受け、またそれに養われる。」 ですからいかにこの聖餐式にあずかることが、私たちの信仰生活にとって大切かということです。これは単なる記念とか象徴ではなく、イエス様ご自身から恵みを受ける時なのです。

20節：「食事の後、杯も同じようにして言われた。『この杯は、あなたがたのために流されるわたしの血による新しい契約です。』」 先のパンが十字架上で裂かれたイエス様のからだを現わしているように、ぶどう液は十字架上で流されたイエス様の血を現わします。こちらでも「あなたがたのために流される血」とあり、私たちの身代わりの犠牲であることが強調されています。そして何と言ってもここで私たちの目に留まるのは、「新しい契約」という言葉でしょう。エレミヤ書31章31～34節：「見よ。その日が来る。――主の御告げ――その日、わたしは、イスラエルの家とユダの家とに、新しい契約を結ぶ。その契約は、わたしが彼らの先祖の手を握って、エジプトの国から連れ出した日に、彼らと結んだ契約のようではない。わたしは彼らの主であったのに、彼らはわたしの契約を破ってしまった。――主の御告げ――彼らの時代の後に、わたしがイスラエルの家と結ぶ契約はこうだ。――主の御告げ――わたしはわたしの律法を彼らの中に置き、彼らの心にこれを書きしるす。わたしは彼らの神となり、彼らはわたしの民となる。そのようにして、人々はもはや、『主を知れ』と言って、おのおの互いに教えない。それは、彼らがみな、身分の低い者から高い者まで、わたしを知るからだ。――主の御告げ――わたしは彼らの咎を赦し、彼らの罪を二度と思い出さないからだ。」 この「新しい契約」という言葉は、明らかにそれまでの契約との対比で語られています。もちろんそれまでの古い契約も、神の契約であり、アダムの墮落以降、神がくださった「恵みの契約」の中に位置しています。エレミヤが預言しているのは、以前の契約が指し示しつつも、これまでは見られなかった最高レベルの祝福が、この「新しい契約」において実現するということです。ではその新しい契約の優れた点とは何でしょうか。ここに三つのことが示されています。

一つ目は 33 節にあるように、「律法を彼らの中に置き、彼らの心にこれを書きしるす」ということです。旧約時代にも律法はありましたが、それを守る力が彼らになかったので、有効に生かされませんでした。しかし神は律法を彼らの心に書きしるしてくださり、彼らは律法を捨てるどころか、いよいよこれに親しみ、喜んでこれを行なう者とされるのです。具体的にそれは聖霊によって、ということです。

二つ目は「わたしは彼らの神となり、彼らはわたしの民となる」とあるように、神との親密な交わりです。おのおの互いに「主を知れ」と言って教える必要がないほど、直接的に神を知り、神と交わる生活に生きる。

そして三つ目は 34 節後半にあるように「罪の赦し」です。このエレミヤが預言し、人々が待ち望んだ新しい契約が、ご自身において成就するとイエス様は言われます。なぜそう言えるのでしょうか。それは「わたしの血による」という契約だからです。新しい契約の新しさは、何と言ってもそれが無限の価値を持つ神の御子の血による、というところにあります。

先ほど、新しい契約の特徴として「罪の赦し」が述べられていました。もちろん旧約時代の人々も罪の赦しを得ていました。しかし旧約のいけにえは、繰り返しささげられなければなりません。ヘブル書 10 章 3～4 節：「ところがかえって、これらのささげ物によって、罪が年ごとに思い出されるのです。雄牛とやぎの血は、罪を除くことができません。」 11 節：「また、すべて祭司は毎日立って礼拝の務めをなし、同じいけにえを繰り返しささげますが、それらは決して罪を除き去ることができません。」 動物のいのちと人間のいのちとは重さが違います。動物の血では人間の罪を贖えないのです。しかし神の御子の血はそうではありません。それは一度限りささげられたことによって、完全に人々を救う力があります。その血によって罪の赦しが現実に現れたのです。またこの贖いがなされて、聖霊の祝福が豊かに人々の上に臨むようになります。旧約時代にも聖霊の働きはありました。しかし救い主は地上に現れてサタンに打ち勝つみわざをまだなし終えていません。天に昇って、聖霊を自由に注ぐことができる状態に達していません。やはりイエス様の贖いのみわざが必要なのです。そうして真の意味での神との親密な交わりの世界が開かれます。罪の赦しを受け、聖霊を頂いた者として、今や人の仲介を経ず、それぞれが神と交わり、神を親しく知ることができます。すなわち万人祭司の世界です。今日もなお教師や牧師が御言葉に従って立てられますが、それは仲介者としてではなく、万人祭司の祝福を助けるためです。大事なことは、この新しい契約の恵みは、ただ神の御子の尊い血によってこそもたらされるということです。

この聖餐式制定のただ中で、裏切り者のことが触れられます。21～22 節：「しかし、見なさい。わたしを裏切る者の手が、わたしとともに食卓にあります。人の子は、定められた通りに去って行きます。しかし、人の子を裏切るような人間はのろわれます。」ここにイエス様の十字架は、神のご計画によることが述べられています。しかし同時に言われているのは、この

ことは少しもユダの裏切りを弁解するものにならない、ということ。神がこのように計画したのだから、ユダに責任はないのではないか、とある人たちはユダを弁護しますが、ユダはそれが神の御心と知って、イエス様を裏切ったのではありません。結果がどうであったかによってではなく、その人は何を考えてそのように行動したのか、その動機によって人はさばかれるのです。

聖餐式において裏切り者のことが述べられたことを思う時、私たちは1コリント11章の「ふさわしくないままで飲み食いする者は、・・・」という御言葉を思い起こすでしょう。また「一人一人が、自分を吟味して、その上で、パンを食べ、杯を飲みなさい。」という言葉も思い起こすでしょう。もちろん自分を振り返って、自分は大丈夫だ、立派にやっている、と結論できたら、聖餐式にあずかる資格を持つということではありません。聖餐式は自分で自分を救えない罪人のためのものです。ですから、自分の弱さとふさわしくなさを思うなら、自らの不信仰を嘆き、心から主により頼むべきです。ウェストミンスター大教理問答問 172：「そうするなら、彼はさらに力づけられるために主の晩餐に臨んで良いし、いや臨まなければならない。」ただここで警告されているのは、主を軽んじて、恵みの機会を悪用することです。主がどんなに大きな犠牲を払ってくださったかを心から感謝し、悔い改めと信仰をもって、私たちはこの恵みの手段にあずからせていただくべきです。

このクリスマスの時、イエス様は私たちのところに来てくださり、ついに十字架前夜にまでたどり着かれました。そしてこれからいよいよ身の毛もよだつ恐るべき最後の苦しみ・戦いへと進んで行かれます。しかしイエス様はご自分のことを考えておられたのではなく、聖餐式を制定し、ご自身の死が与える大きな祝福の世界に弟子たちを、また私たちを導き入れることをご自身の喜びとされました。私たちはこのために、人となってこの時、私たちのところに来てくださった御子を、心から感謝して受け入れ、礼拝したいと思います。そして主が特別な思いをもって与えてくださった聖餐式を心から感謝して守り行ない、キリストにこそ目を注ぎ、その尊い血によって開かれた神の最高度の祝福、新しい契約の恵みに生かされる者とされたいと思います。